

トラブル
魔法少女ミサキ2
体験版

作・@1039

登場人物

あさみや みさき

朝宮 岬

私立桜ヶ島学園の一年。赤い髪がぴんぴんと跳ねて立っている。正義感が強く弱いものいじめや曲がったことが許せない。小柄で華奢な割には喧嘩でも負けたことがなく、小麦色に日焼けした健康的な少年だったが、ある日偶然手にした魔女アルトウナの鍵によって強制的に女の子にされた上に、火の精霊王グリフォンと契約させられ魔法少女になってしまう。変身後は、髪が燃えるようにオレンジ色になり、薄く透けた赤い魔法衣とマント、そしてトンガリ帽子を被っている。

あさみや あいな

朝宮 愛奈

ミサキの妹で、実は秘かに魔法少女として日夜モンスターを退治している。ちょっと抜けたところがあってトラブルにあいやすが、正義感が強くて頑張り屋でもあるので半ば強引に魔法少女に仕立て上げられても一生懸命戦っている。少々ブラコン気味で兄に自分を守る従士になって欲しいと思っていた。普段はポニーテールの黒髪だが変身するとライトブルーのツインテールになる。

いずみ れい

泉 玲

ミサキと幼馴染で寮では同室の切れ長の目をしたオカルトマニアの背の高い美少年だったが、稀有な資質に目をつけられ、女性化の上に金気の精霊使いにされる。元々髪が長く容姿も整っていたので、黒髪が美しいブロンドになり、白い肌の美少女になる。魔法衣は金属のビキニアーマー状。

リリア・アルトウナ

七つの精霊王と契約し数百年の時を生きる七精女帝の異名を持つ大精霊魔法使い。世界中を旅し、五百を超える従士団を持つことでも有名。七大精霊以外にも希少な精霊と契約を結び、人間でありながら闇の精霊王と戦ったこともある。

ギリメカラ

数百年にわたりアルトウナに仕える最強の従士エラワンとして日本までアルトウナの鍵を携えて飛来したが、闇の波動に撃たれて魔獣としてのかつての姿を取り戻す。アルトウナが闇の精霊術師を倒し、雷精王の力も借りて光の眷属へと転身した過去を持つ。巨象のような姿は精霊喰らいとも恐れられ、七つの鼻の先端にある口で精霊を喰らい、精気を吸い尽くす。

海座 豪史

桜ヶ島学園の不良を束ねる四天王最強のカリスマであり、空手部のキャプテンだったが、ギリメカラの手下となり、レイと無理矢理契約し、金の精霊従士になって液体金属化する。はりねずみのような長髪でがっしりとした長身。破壊神と呼ばれるほどの圧倒的な強さを誇る。だが、最強と言われる由縁はその強さよりも、野獣のように傍若無人な性格にある。

リユーカ・ルナ・サリスティアス

月の女神ルナの子孫で月の国の姫。気位が高く常に冷静沈着で精霊の力のバランスを保つ王家の義務を何よりも重んじている。王族の中でも稀に見るほど魔力が高く、数々の魔法を幼少の頃から使いこなしている。

しっとりとした煌めく長い黒髪と透き通るような白い肌。輝く金色の瞳を持つ。宮殿では白いローブを着ているが、外出時は同じく純白の動きやすい服装をしている。

フロウ・ジェンカルハット

月の王宮に伝わる聖十二剣を授かる聖騎士の1人として光の剣を操る剣の達人だが、普段はちよつと気の弱いおどおどした銀髪褐色肌の少年。ボブカットで身体の線も細く、女の子にも見える。ただし、リユーカの護衛騎士として絶対の誇りと強い意志を持っている。

ミリト・ジエンカルハツド

フロウの妹で、ミリオの双子の姉。地球駐在の下級王族補佐官。褐色の肌にウェーブのかかった長い銀髪。温和で人当たりが良いが、意外と腹黒い。魔力は妹に及ばないが、高度な魔術の知識を持つ。

地球にある月の民駐在館『竹取』で巫女装束を着て働いている。任務の時は、白い袖のタイトなチュニックと朱色のプリーツスカート、二ーハイの白いタイツとショートブーツになる。

ミリオ・ジエンカルハツド

フロウの妹で、ミリトの双子の妹。地球駐在の下級王族補佐官。褐色の肌にツインテールの銀髪。気が強く男っぽいが、兄が実は大好き。身体的能力に秀でる闇の民の中で例外的に高い魔力を持つ。また、物質や生物を瞬時に復帰させる『トーキン・ヘッス遠からぬ帰還』という固有魔法を使う。

これまでのトラブル

ある日、カップルや親子連れで賑わう東京の観光地お台場に現れた謎の『隕石』。レインボーブリッジのすぐ側で湾内にごつごつとした岩肌を見せている『それ』は、実は魔界の王が放った人間界と魔界を繋ぐ『ゲート』であるという。

伝説やおとぎ話の中で悪魔や妖怪、魔獣と呼ばれる存在が、歴史の影で実在し、科学などモノともしない圧倒的な力で暴れようとしているのだ。

かつて世界には至る所にゲートが存在し、強大な魔力と欲望に満ちた本能に駆られる凶悪な生物が無力な人間を獲物とする時代があった。だが、魔界と対極をなす天界の使者、その力を分け与えられた選ばれし勇者たちによって魔物はゲートの向こうへ追い戻され、全てのゲートは閉じられ、破壊されていた。

やがて、その戦いが神話とされるほど語り継がれ、天界や魔界のこと、魔法を操る人間の実存など子供の夢見語りとなってしまう。それこそが人間が作る平和な地上の楽園に繋がると偉大なる魔法使いである賢者たちが考えたからだ。選ばれし者にしか使えない力は、ゲートのなくなつた人間界の権力者にとって格好の兵器になりうる脅威でしかなかったのだ。

だが楽園を目指した賢者たちの思惑を裏切りつつ、「選ばれた力」など必要としない科学技術によって権力者たちが争いを続ける現代、再び現れた新たなゲートへの対策を、歴史の影に隠れてきた数少ない魔法使いの末裔たちが模索し始める。

強大な魔力を持つほど異界への移動は困難であるため、今はまだ伝説に語られたような魔

物は侵入してきていない。魔界の軍勢は人間界の様子を探り、ゲートを拡大しようとしている段階なのだ。

その侵攻に備えようとする一方、逆にゲートを越えて魔界に侵攻すべしという過激な一派も人間界にあるが、まずは人間側も強力な魔法使いを数多く揃えなければならぬ。神話の時代に戦った魔法使いの数千分の一と言われている戦力で戦争などできるわけがない。

ヨーロッパにおいて七精女帝と謳われた伝説の魔女リリア・アルトウナ。七つの精霊王と契約を交わし、五百を超える従士を従える、神話の時代ですら比肩する精霊使いはいないと言われる史上最強の大精霊魔法使い。

彼女もまたゲートの出現を憂慮し、同時に自らの築いた精霊魔法の体系を後継させるに相応しい資質を持つ者たちを探し求めている。七大精霊王と契約を結べる資質と魔力を持った少女たちを。

精霊とは神々に定められた人間界における理を司る存在。彼らの世界である精霊界は、様々な属性に分岐し、それぞれに王を持つ。つまり、理の支配者。それは理を定めるがゆえに、風の流れ、火の猛威、木々の生長を常識を覆して操るほどの力を持つ。

それを魔法として行使するのが、精霊王と契約した魔法使いの力。理の中で魔法を操る通常の精霊使いとは次元が違う力をアルトウナは七つの鍵に託し、最強の従士であるエラワンによって東京へと運ばせた。

だが、ゲートから放たれた魔界の瘴気に当てられたエラワンはかつて精霊喰らいと恐れられた魔獣ギリメカラの姿を取り戻す。黒毛に七つの鼻を持つ巨象は、闇の精霊術士に操られ

て大陸に雷の雨を降らせていたのだが、アルトウナによって闇の精霊術士は葬られ、雷精王の助力によってギリメカラは光の眷属へと転身していたのだ。

魔獣の姿を取り戻したエラワンは、七精女帝の力を継ぐべき鍵姫たちを鹵獲し、彼女たちが契約した精霊王の力を我が物とし、アルトウナへの復讐を果たそうと企む。

精霊使いは、契約のために精霊との精神的な交合によって彼らを体内に受け止める必要があるため、女性である必要がある。

だからアルトウナは、資質を持った者が男であった時には容赦なくその者の性別を女性化する月の精霊魔法を仕込んでいた。

隔絶された山の中の学園に問題児を集めた桜ヶ島学園第二校舎。そこに通う赤毛の少年、朝宮岬は、偶然手にしたアルトウナの鍵によって認められ、無理矢理女の子に性転換され、火精王グリフォンと契約を果たし、魔法少女ミサキとなる。

一方、百乃木学園の新体操部でエースとしての実力とアイドル級のルックスを誇る小早川鳴流は、水精王ユルングと契約した魔法少女ナルルとして活躍していたが、そんな彼女の前に闇に堕ちたエラワンが現れる。

そこにナルルの母でありながら、少女のままの容姿を保つ看護師、小早川美帆が木精王ヴイゾフニルと契約した魔法少女ミホとして現れる。

2人の精霊王契約者を前にしながら魔獣の姿となったエラワンこと精霊喰らいギリメカラは、母娘魔法少女の魔法をことごとく無力化する。更にギリメカラは、悪魔の指輪によって

呪われた母から産まれたミホ、そしてその娘のナルルの血も情欲の呪いを受けていることを知っており、母娘を淫欲の虜にしてしまう。

エラワンは捕えたアルトウナの鍵姫たちに桜ヶ島学園の不良を束ねる四天王と従士契約を結ばせる。従士とは、本来、強大な精霊魔法を行使する間、術士を護衛し、そのために精霊の力を肉体に借り受ける者だが、悪用すれば、精霊術士を魔力源とした能力者として力を振るう戦士にもなる。

ならず者が集まることで第二プリズンとも呼ばれる桜ヶ島学園第二校舎がある山は、巨大な精気が自然に集まる龍穴と言われる場所であり、そこに呼び込まれるように集う者たちには自ずと強い精気が宿っている。

そこに目をつけたギリメカラは、第二プリズンを根城とし、生徒たちに次々と従士契約をさせて手兵としていく。中でも四天王と呼ばれる生徒たちは抜群の適性を見せ、その強大な力は未熟とはいえ精霊使いとして目覚めたミサキですら退ける。

陰陽師の名門、柊一族の巫女少女である柊真菜は、百年に一度の天才と称された柊美沙の後を継いで、雷獣と陰陽術を使う「神鳴り巫女」として妖魔を滅する日々を送っていたが、アルトウナの鍵に見出されて雷精王トールと契約し、魔法巫女少女マナとなる。だが、雷を降らす魔獣ギリメカラの前では彼女の魔法は全て馳走となり、彼女もまた、ギリメカラの虜囚となる。

一方、女の子となった親友ミサキを元に戻す方法を探ろうとする泉玲の前にエラワンの手先となった四天王最強の海座豪史が現れる。彼ら2人には精霊の中でも異端である金精の適

性があるという。

金精王ヒュドラは、かつて精霊界を混沌と滅亡の危機に陥れた闇の精霊王の下僕である魔獣であり、精霊界に縄張りを築いて君臨したことで新たな精霊王となった。他の精霊の干渉を受けず、その力を封じる異端の精霊故、その適合者も滅多にいない。

龍穴という土地柄故に奇跡的に2人の適合者を見つけたエラワンは、金精王の鍵を海座に預ける。どちらかが鍵姫に、どちらかが従士になる。海座によって女性化され、強引に契約を結ばされた魔法少女レイ。彼女もまた、エラワンの野望の餌食となる。

従士となった四天王の力で窮地に陥ったミサキを助けたのは実の妹であり、風精王ティホンと契約した魔法少女アイナだった。

アイナと共に玲を追おうと電車に乗ったミサキ。だが、魔法少女姉妹を精霊にとって禁忌である金精王の力を手に入れた宿敵海座が襲い、2人はなす術もなく陵辱の餌食となる。

6人の鍵姫を虜囚としたエラワンは、最後の1人を捜すため、アイナを人質としてミサキを解放する。ただし、海座を伴って。

ミサキにとつて残された希望は、土の鍵姫を味方につけて海座を倒し、七精女帝アルトウナに助けを求めるしかない。

第1章 契約ピアス

「さて……と……」

体育倉庫というのは、独特の怪しい雰囲気がある。それが全寮制の男子校である桜ヶ島学園第二校舎であつても。暗く、狭く、カビ臭い密室に、静かに佇むハードルや跳び箱、長縄跳びやバレーやバスケットのボールを入れた大きなカゴ、得点ボードなどその競技に関係ない者からすれば何か分からないものまで入り交じった混沌とした倉庫。明るく健康的な体育館の片隅に閉じ込められたような道具たちが作る鬱屈とした影が、その陰湿な空気を生んでいるのだろう。

まして第二プリズンと呼ばれるような荒くれ者の問題児ばかりが集められた校舎に突如現れた美少女が、授業に使う体育マットの上に体操服の上着一枚を着た状態で座らされていれば尚更のこと。

「おい……オ、オレに……こんなところで、こんな格好させて……何するつもりだよ？」

赤毛のショートカットがよく似合い、肌も小麦色に焼けた健康美に溢れた美少女だが、彼女はつい先日までは向かうところ敵なしの格闘少年だったのだ。だが、少年にとっては呪いにも等しい魔法によって女の子に変えられ、あげくは魔法を使って魔物を倒す魔法少女にされてしまった。格闘少年の朝宮岬は、魔法少女ミサキとして偉大なる七精女帝の後継者となつたのだ。

なのに、さらに呪わしい運命は魔法少女に完膚なき敗北を与え、勝ち気な少年を女としての徹底的な陵辱によってメス奴隷にまで貶めた。男としての誇りを持っていた少年が、男の肉器を啜え、恥ずかしい女性器に呑み込み、愛らしい声で喘ぎ鳴かされたのだ。

目の前にいる学園最強の少年によって。

「ふん、ちよつと余裕を与えると生意気な態度に戻りやがる。ま、苛めがいがあつて愉しいがな」

第二プリズンの不良を束ねる四天王の中でも最強を誇る空手部主将の海座豪史。はりねずみのようにささくれ立った長髪で、小柄なミサキとは頭2つ分ほど身長差がある長身で日本人離れた体躯をしている。

更には精霊魔法使いとなつたミサキにとって天敵ともいえる、金精王の精霊使いの従士でもある。禁忌の精霊とも言われる金気の精霊は、本来存在しない精霊の力であり、他の精霊の力を封じる力を持つ。

しかも、海座の契約相手である魔法少女は、幼い頃からミサキの親友であり、女の子になつたミサキにとっては胸が痛くなるほど愛しい存在として女の子の初めてを捧げ、恋人となつた泉玲なのだ。彼、いや彼女もまたミサキと同様に魔法で女の子にされた魔法少女レイなのだ。レイの場合は海座によって無理矢理鍵の契約を結ばされ、その上に海座と重視契約をも結ばされた。何よりミサキにとって屈辱なのは、海座は身体を奪うと同時に、その心すらも征服して、彼の色に染めてしまったことだ。最早、レイは身も心も海座に捧げた忠実な愛玩具なのだ。

そうして恋人を奪われた相手に、ミサキは力でも魔法でも敗北し、更に性奴隷として屈服したのだ。

「これから、俺とお前で土の精霊王と契約した女をひっ捕まえに行くわけだが、さすがに前の力を野放しにするのはまずいってことでな、俺の奴隷にいい物を作らせたんだよ。お前の大好きな、恋人だっけ？ 今は俺のことが好きみたいだがなあ。ま、お前への最期の贈り物ってわけだ」

かつての海座は、硬派な男気のある不良だったが、エラワンと会ってからハマるで人が変わったように陰湿で残忍な陵辱者となっている。なのに、レイだけではなくミサキもまた、この男の虜となっている。その圧倒的な獣性に女としての劣情が呑み込まれたいと震えてしまふのだ。

「レイが……作った……贈り物……」

女の子になったミサキと一晩で何度も身体を重ねて愛を交わしたレイ。だが、レイもまた女の子にされ、そして海座によって強引に身体も心も奪い去られてしまった。

「悦んで受け取れよ。『レネゲイド・リザルト従者への報酬』だよ」

海座に惚れてしまったレイが、海座と2人きりで行動する元恋人へ贈ったものが、ボトリと重い音を立ててマットの上に落ちる。

鉄の錘おもりが3つ。丸い錘にキーホルダーのような留め具が付いている。細い環状の留め具を穴に通してぶら下げるようだ。

「そいつはお前の魔法を封じるわけじゃないが、精霊力を吸って重さを増していく。つまり、魔法を使えば使うほど重くなるってわけだ」

「こ、これを……持っていたらいいのか？」

ひとつ摘まみ上げてみるが、見た目よりも重い。魔法で作られたモノだから、ただの鉄ではないのだろう。

「ばあか。なんのために輪っか付いてんだよ。それはな、ピアスだよ。耳なんかじゃなくて、もっとお前らのいやらしい精霊力が集まる部分に付けるためのな」

そう言いながら、海座は体操服の上からミサキの乳首の部分を指で弾く。

「ひぎいっ！ なっ……ま、まさか、こ、こ、こんな場所に……こんな重いの付けられるわけないだろ！ だ、大体、ピアスって、刺すってことだろ？」

海座の残忍な笑みを見て元少年は青ざめる。奴隷の主人が言ったことは絶対なのだ。しかも、ピアスは3つある。悪い予感しかしない。女の子になって間もないミサキだが、その短い期間に濃密に女としての身体を味わい、味わわれた経験が少女に警鐘を鳴らしている。

「さあ、まずは自分で乳首を勃てるよ。コリコリコリコリ弄って、アンアン声出すんだよ。ピアス刺して垂ぶら下げのために、スケベに喘ぎながら乳首おっ勃てるんだよ、おらあっ！」

ガチャリと音を立てて海座が鎖を持ち上げる。元少年の首には鉄の首輪が嵌められ、その鎖と繋がっている。常に「飼われている」と意識させるための首輪が引き上げられ、へたり込んだ赤毛の少女は軽く釣り下げられた状態にされる。

「ひう、っぐ、や、やるっ！ や、やりますからあっ！ く、苦しっ、お、降ろして……」

「ダメだな。いちいち口答えがムカつくから、このままやれよ、ほら。苦しいのも好きだろ？ 窒息するまでチンポで喉突かれてイッてたろうが？　なあ、オカマ野郎？」

苦しい喉がゴクリと鳴ってしまう。思わず喉奥を突かれる苦しみを思い出してしまう。唇が痛いほど拵げられ、熱い肉塊に吸い付いてしまい、舌はごっごつとした塊の感触をまざまざと脳裏に焼き付け、鼻腔の奥からむせるほどの精臭が臭い立ってくるあの苦悦を。息継ぎする暇もなく次々と喉に粘っこの濃厚な子種を流し込まれた饗宴を。そういう激しい陵辱を受け続け、勝ち気な少年の心は、いやらしいマゾメスの女へと変貌していったのだ。

（だ、だからって……ち、乳首に、ピアスなんて……レイが……オレに、こんなものを……こんなことさせるなんて……）

裏切り合った恋人同士の末路なのだろうか。体育倉庫で首を吊られながら、元少年は盛り上がった柔らかな双乳を体操服の上からそつとなぞり、ゆっくりと揉みしだく。

「はあ……んっ……こんな……レイ……オレ……んうっ」

残忍な笑みで見下してくる陵辱者の視線を感じて潤んだ瞳を逸らし、女体化した自分の柔らかな身体をまさぐり、桜色の乳突起が汗で薄く透けてくると、ほっそりとした指先でそれを円を描くようになぞり始める。

「んう、あ、つくう……こ、声、出ちゃう……」

「けっ、ホントお前はドスケベなオカマ野郎だな。犬みたいに首釣られて、オナリながら情けない声で鳴きやがる」

かつて男同士で拳を交えた男に侮蔑を込めてなじられているのに、少女の官能は甘く痺れ、

指先から電気が走っているかと思うほど、柔らかく乳首を擦る度に身体が硬直して震えてしまう。

「硬派ぶってたお前が、自分でおっぱい揉みまくってアンアン犬みたいに鳴いてるとはなあ。おら、もう乳首がビンビンに勃ってんじゃねえか」

恥ずかし過ぎて反論もできない。白い体操服がぷっくり浮き上がるほどその下の敏感な桜色の突起は尖り立ち、びくびくと激しく脈を打っている。マシユマロのように柔らかい胸を揉むと、ゆっくりとした波のように快感が広がるのに、先端の突起を弄ると、びりびり痺れるように激しい快感が襲ってくる。もちろん胸だけではない。身体中に淫靡な血が駆け巡って火照り、じつとりと汗が滲み、柔らかな体操服が少女の小さな身体に貼り付いてくる。

「ああ、あうう、んうああっ！ は、恥ずかしいっ！ 恥ずかしいのにつ、オレっ、ち、乳首、勃たせて、感じすぎちゃってるよおっ！」

涎が半開きになった口から滴って、体操服に染みを広げていく。情けない格好を仇敵の前で晒しながら悶絶する少女に、男は冷徹に錘を指し示す。熱くなった身体が、急激に冷めていく。

「そ、そんな……ホ、ホントに……オレ、乳首に……オレの手で？」

甘い快樂から一気に逃げ場のない恐怖へと陥れられる。海座という陵辱者は、そうやって敗者の精神を崩し、支配してくる。支配された少女は命じられるがまま、コリコリと乳首を弄っていた指で冷たい鉄の塊を摘み上げる。

「震えてんなあ。くっくく。情けねえ。ざくつとやつちまえよ、ほらっ！」

後ろに回った男が体操服をまくり上げ、剥き出しになった小振りな膨らみをきつく掴んでくる。

「い、いだっ！」

情けないが目尻に涙が浮かんでしまう。だが、男は容赦なく乳房を鷲掴みにし、そのまま絞り上げるように乳突起を前に突き出させる。

「ほら、やれっ！ やれよ、オカマ野郎っ！」

留め具を摘むと、丸い鉄環が開いてざらりと先端が光る。まるで釣り針。それを、自分の尖り立ってびくびくしている敏感な肉突起に突き刺せというのか。冷たく尖った切っ先がちよつと触れただけでもピンクの突起から全身に稲妻のような痛みが走る。

「あ、ああ、うあ、あ……っんっぎい……っあああああああっ！」

なのに、その中におぞましい甘美さも混じっている。そう思ってしまった気の迷いが、ぷすりと乳首を貫いていた。

「あっううああっ！ あ、あっんううああっ！」

言葉にならない叫びが体育倉庫に響く。痛くてたまらないのに、陵辱者は更に乳房をきつく掴んでくる。しかも、ミサキ自身の手もまるで意識と乖離したかのようにぶすぶすと針を更に突き刺し、鉄の輪が自分の肉の中を通して回っているのを噛み締めるように味わい、喉から悲鳴を吐き出すことに酔いしれている。

「はあっ、あっああっ、んぐううっ！」

荒い息と涎と叫びが喉から舌を垂らした口を通してだらしなく吐き出される。醜態。情け

ない。それを晒して、白目を剥きながら少女は自分の乳首を抉り、ピアスの輪を閉じた。だが、それはまだ悪夢の始まりに過ぎない。

「……あ、ああ……んうああ、やあ、こ、れ……つくうあああああつ！」

錘だ。針で貫いたばかりの穴が重力に引っ張られ、乳首が裂けるかと思うほどの痛みに襲われる。

「裂けやしねえよ。ほら、こっちも早くしろ」

だが、背後の陵辱者は少女の泣き叫ぶ声を無視して命令する。左の乳首が裂ける恐怖に襲われながら、ミサキは右の乳首にも冷たい針を刺していく。だが、その針の進みは一つ目よりもずつと遅い。左の疼くような痛みが気を逸らせるのだ。そのせいで右の乳首はじつくりと責め苦を味わうことになる。

「ようやくかよ。どれ、そんなに重いのか？」

「んうああつ、も、も、ダ、ダメ、あ、オレ、もううあああああつ！」

たっぷりと時間をかけ、どうにか2つ目の鉄環を閉じた瞬間、残忍な支配者は錘を一気に引っ張った。勝ち気な少年だった魔法少女は情けなく白目を剥きながら、下着も履かせてもらえない剥き出しの秘所から黄色い飛沫をまき散らしながらマットに突っ伏し、気絶した。

「起きろ、オカマ野郎。まだ終わってねえぞ」

目を覚ましたミサキは、跳び箱の上につぶせの状態にされていた。四肢を投げ出した格好で尻を突き出し、跳び箱にまだジンジンと痺れている乳首が擦れている。

「ま、まだって……んうああっ！ ちょ、お、お前、海座っ……何を、あんぐうっ！」

「おいおい、まだ口の聞き方を覚えてねえのかよ。覚えの悪い奴隷だなあ、お前は」

そう言いながら、太くごつい指がぐりぐりとミサキの肛門を捻るように抉ってくる。失禁した小便で湿った排泄口が恥ずかしい音を立てて掻き回されているのだ。

ぐちゅ、ぐちゅ、じゅちゅちゅっ。

「ふあああっ！ や、やめ、海座様あつ！ や、やめて、下さいいっ！」

「ああ？ ねっちよりいやらしく指に絡み付いてきてよく言うぜ。こりゃ、普通のケツ穴じゃねえよ。しっかり仕込まれてアナルセックスが気に入って、ちんぼぶち込まれて精液流し込まれたいケツマンコってやつだぜ、なあ？」

男の言う通り、ミサキの排泄口はかつての窄まった皺穴ではなく、桜色にぷっくりと膨れてよく開発されたアナルセックスの穴になっている。指を食い締めて、腸奥をほじられるのを悦ぶ変態の穴だ。

「だ、だって、それは……お、お前らが……いっばいエッチなことしたから、んううっ！ か、海座様の……おちんぼ啜えたからあつ！」

海座の指は太く、長い。処女を捧げた玲のペニスよりも大きいだろう。それがぐねぐねと蠢きながら、小さなお尻の小さな穴を遠慮なく抉る。なのに、痛みと苦しみを少女は快楽と感して悶えて喘ぐ。自分の喘ぎ声がコンクリの床と壁に響くのを聴いて、女になった自分の浅ましさに幻滅して悦ぶ。

「ふあああっ！ お、奥まで……奥までほじっちゃダメええっ！ オ、オレ、で、出ちゃう、

また……そんなの嫌だあっ！」

「ふはは、今度はウンコ漏らしちゃうか？ いいぜ、締めりの緩いケツ穴に栓をしといてやるよ！」

海座は金精の魔法少女と契約したことで、身体を液体金属にできる。野太い指がぐにぐにゆくと液化化し、少女の尻の中へと潜り込んでいく。まるで単体の生物のように手から離れた太い指がうねうねと排泄口を這いずり、直腸へと潜っていく。普通なら届くはずのない奥まで這いずり、腸壁を擦り立てる。

「にゅああっ！ な、中、か、掻き回すなよおっ！ ひあ、や、んううっ！」

直腸の襞が奥の方まで指で擦られ、こびりついた排泄物が刮げ取られているのが分かるほどに強く掻き回されている。更に2本、3本と指が差し込まれ、それも芋虫のように這いずり込んでくる。

「気に入ったか？ 俺の指がお前のケツの穴の中にあるようなもんでな。今日からは、お前がウンコをするのも我慢するのも、俺次第ってわけだ」

おぞましいことを平然と言う。その言葉通り、1本が内側から栓となつて少女の菊門に蓋をする。だが、残り2本は延々と腸内を蠢いている。身体の汚れた場所に男の存在がずっとあるのだ。そして、排泄という恥ずかしい行為を支配された。

「便利な栓だぜ。俺様がこうやって自在に操れるんだからなあ」

男の声に従って、栓となつた塊が円になってぐいぐいと肛門を開く。まるで人工肛門だ。だが、たまつたものではない。

「っぐうっうあっ、ちょ、ひ、広げないでえっ！ あ、うぐううああっ！」

肛門を内側から拡張されて少女は悶絶するしかない。自分で閉じることは許されず、直腸の中で2本の指が捻れ回り、ぐっちょよぐっちょよと掻き回す音が丸聞こえになる。

「ちよつと、音おおっ！ は、恥ずかしいの響かせんなよおっ！ と、閉じて、肛門閉じてくださいっ！ 音鳴らさないでくださいっ！」

鉄の肛門は海座の意思ひとつで自在に開閉を繰り返し恥ずかしさに泣き叫ぶ少女を悶絶させる。

さらに、中で巨大芋虫のようにのたうっていた指が表面にいぼいぼを出したり、団子のように球体の連なりとなつて縦横無尽に暴れ回る。腔の裏側から圧迫されて腹がぼこぼこと歪むほどの傍若無人な暴れ方で声にならない声を上げてのたうつミサキ。

しかも、身体をばたばたと揺らすと、針が刺さつてまだジンジンと熱を持って尖ったままの乳突起が跳び箱に擦れ、痛がゆい快感までもが襲ってくる。

「っはああ、ちょ、も、わ、わけ、分かんないっ……お、おかしく、なるうっ！ あご、おおううっ、お、お腹、こわ、こわれえ、んううおおっ！」

「うるせえなあ、宿便とつてやってんだぜえ。うわ、臭えなあ、お前のケツ穴の中。中の襞はきれいな色してんのになあ」

「ううあ、み、見るなあっ！ やめ、うううああっ！ と、閉じて、んううおおああっ！」

気を抜くとうんちが飛び出してしまいそうなのがする。だが、肛門の開閉は最早海座の意思に支配されている。自分でうんちを我慢することもできないし、出すことも海座次第。そ

れなのに、排泄を促すように腸壁を刺激され、腹奥を掻き回される。

その上、醜悪なピアスで貫かれた乳首が浅ましく尖って快感にひくつく。恥ずかしさと屈辱と、そしておぞましい快樂で頭が真っ白になり、だらだらと涎を垂らして喘ぎ泣く少女。

「はあ、イツ、イツちゃう……やだよお……う、うんち、掻き回されて……頭、白くなるううああああつ！ と、止め、止め、ああああんあああつ！」

お尻を激しく揺らして悶絶する。乳首を貫かれて、肛門と排泄物をいじられて悦びの絶頂へ昇ってしまったのだ。

「はあはあ……こ、こんな……こんなのお……」

荒くなった呼吸を整えながら、痙攣でびくびくしているお尻が最悪の放出をしてないことを確認する。海座が蓋を閉じなければ、汚物を撒き散らしていたかもしれない。逆に、排泄したければ、この残忍な陵辱者に慈悲を乞い、許しを得て男の望む格好で排泄をしなければならぬのだらう。

（ど、どんどん支配されていく……全部、見られて、全部、あいつのものにされて……）

「ま、便秘とは無縁だぜ。宿便もなくなつて、肌がきれいになつて万々歳だろ？ うんちしなくなつたら、いつでも言えよな」

「……つくう、こ、こんな、動かれてたら……すぐ、したくなつちゃうう……」

男の指が生き物みたいにのたうち続けている。腸の中までも支配されたのだ。だが、そんなものではミサキの悪夢は終わらない。錘は後ひとつ残っているのだ。それが、少女の剥き出しの尻の上にひんやりと冷気を放つて置かれる。

「さて、もうひとつ元恋人からのプレゼントが残ってるわけだが、あの残酷なお友達は、なんで3つも用意したんだろうな？ これ、どこに着けるんだろうなあ？」

乳首を串刺しにされ、排泄口に液体金属を流し込まれ、これ以上どう虐待を受けるといのだろうか。レイがこれほど酷いことをするのだろうか。

疑心暗鬼に陥り、心を締め付けられるミサキに追い打ちをかけるように、開いた鉄環の針先で柔らかな尻たぶをからかうように突いてくる男。

「ひい……い、いた……や、やめてください……」

「なあ、どこだと思う？ どこに着けられたい？」

自分が海座に支配されていることを思い知らせるための錘。レイから捨てられ、海座の中でレイ以下であるただの所有物であることを証立てる錘。最も屈辱的で、もつとも恐ろしい場所だ。

「……お……お……おまんこ」

自然と、魔法少女は恥ずかしい部位の名前を口に出していた。

「ふはははっ！ そうか、おまんこにブツ刺されたいのかよ、変態野郎！？」 呆れるほどのマ

ゾだな、お前はよおっ！」

自ら言わせることで更に屈辱を煽られる。

「だが……惜しいな、もつと精確に言っただけじゃないとなあ」

残忍な陵辱者の言葉が冷たく耳を打つ。そして、冷たい針先は、最も密やかで、最も敏感で、最もいやらしい部分をなぞってくる。

「ひいつ……ど、どういう意味だ……ちよ、ま、待つて、さ、刺すなよ……マジで……や、やめる……やめてください、海座様あつ！」

哀願など耳に届くわけがない。針先は陰唇をなぞり、うつ伏せの少女の秘唇をどんどん下っていく。もう、ミサキにも終着点が分かっている。残りひとつの錘。それは、最も敏感な部分で、最も刺されたくない場所に着けられ、少女に永遠の屈辱を約束するだろう。

「ク、クリ……トリス……」

「せえいかあああいつ！」
ぶすう。

凄まじい絶叫が響く。情けないことに、乳首で激痛を伴った屈辱を受けながら、それでもミサキの秘唇は恥ずかしいほどに蜜を垂らしていた。針先で陰唇をなぞられても身体はひりひりと痺れるように快感を感じていたのだ。だが、やはり、そんな甘い感覚は消し飛んでしまった。

愛蜜と小便に濡れて尖り立ってひくついていた陰核に、冷たい針が突き刺さり、一気に貫く。

「つぎあああああつ！ ダメダメダメダメエえええつ！ ぬ、抜いて抜いてよおおつ！ 痛い痛いいいいいつ！」

正気の間人なら耳を塞ぎたくなるほど、魔法少女は凄まじい狂乱ぶりで泣き叫ぶ。破瓜の痛みすら忘れるほどのおぞましい感覚。だが、残忍非道な男は、その叫びに歓喜し、さらに針を捻りながら敏感な肉豆を摘み、開いた穴と針を擦り付ける。



「ひぎいいいあああつ！ な、何してっ、くあああつ！ つ、摘まないで！ 摘んで引っ張るなああああつ！ いぎあああああつ！」

処女を失った時も、肛門を犯された時も、苛烈な陵辱を受けた時も、ここまでおぞましい痛みはなかった。しかも、これは永遠の屈辱を刻み込む痛みなのだ。

「泣いてる割には、おまんこからはダラダラ汁が垂れて来てんぞ。お前、ひよっとしてクリトリスにピアス刺されてんのに感じてんのか？」

男の言う通りだった。最も敏感な肉豆は、針に貫かれて、指で潰されて苦悦をもたらしている。そう、快樂だ。圧倒的な痛みの中にある蕩けるような甘美が、指で搾り出されたかのように襲ってきて、同時に全身を貫き、ミサキを得たいの知れない絶頂へと導いていく。

その怖気立つ苦悦を味わいながら、再び少女は小水を漏らしてしまう。痛みを忘れるほど思考が弾け、たがが外れてしまったのだ。

「……ああ、うええ、あ、ああ…………」

跳び箱の上で白目を剥いて舌をだらりと垂らした魔法少女は、再び失禁しながらクリトリスが痙攣するたびに絶頂に登る。痛みが治まるまで、何度イクのか分からない。そして、治まった時には、少女は自分を支配する3つの錘が着いた恥ずかしい身体を嘆くことになるだろう。

意識も朦朧とするミサキの霞んだ視界に、黒い影が映る。海座ではない誰かが、体育倉庫にいる。誰もいなかったはずなのに。自分の恥ずかしく情けない姿を見ている。その恥辱を感じながら、再び気が遠くなっていく。

だが、陵辱者が簡単に気絶を許すことはなかった。

「おいおい、また寝るつもりかよ。どんだけ軟弱なんだ、お前？」

軽く言いながら、まだ針が刺さったばかりのクリトリスに着いた錘を無造作に高く摘まみ上げ、どすんと跳び箱に叩き付ける。

「つつつつひいいいいいいいいいいいっ！」

声というより、音というべき甲高い鳴き声が響き、失禁と恥蜜の潮吹きが同時に迸る。引つ張り上げられ、伸びきったクリトリスに鉄の振動がハンマーで叩かれたように響いてきたのだ。脚の付け根から脳天まで破裂していくような錯覚の中、少女は激痛の快楽を覚え、苦悶の表情を苦悦の表情に変えて失神する。

続きは本編でお楽しみください！

Copyright (c) 2009 @039 All rights reserved.

この作品における内容全部について、無断複写・複製・転載はお断りいたします。

URL: <http://1039r.un.bl0g90.fc2.com>